

豊後の明珠く梅園・蘭室そして万里く（上）

甲斐素純

はじめに

平成十五年十一月五日、平道公民館に於いて大分県速見郡日出町大字平道の平道老人クラブが主催した「脇蘭室先生一九〇回忌辰祭」の記念講演に、筆者ははからずも講師を依頼された。そこで「豊後の明珠・蘭室く梅園・蘭室そして万里く」と題し、講話させていただいた。

当日は、蘭室が四十歳の時手島君山に描かせた自分の肖像画と、同じく母の肖像画（賛は、蘭室の師中井竹山）を、子孫に当たる大分市在住の脇誠氏が持参して下さい、里帰りとして郷土の人々も直接拝見することができたことは、幸せであった。注①

脇蘭室に関する研究・参考書としては、大分県文化財専門委員・別府大学講師であった久多羅木儀一郎（一八八五く一九六五）の大変な努力によって完成した『脇蘭室全集』（昭和五年七月・久多羅木儀一郎編・発行）があり、その全貌を知ることができる。また、新聞記者で漢学者であった西村天因（一八六



脇蘭室先生第190回忌辰祭で講演をする筆者

（衛藤保氏提供）

銀臺公（肥後熊本藩第六代藩主細川重賢^{しげなか}）に知遇を受け、時習館の學政を創定して、雄藩の文教を興せり、愚山は初め笈を熊本に負ひ、後褐を熊本に釋き、遂に退きて玉山の生地なる鶴崎に居たり、玉山は文章世に鳴り、姓字時に馳せたれど、愚山は其名甚だ著はれず、然れども之を三浦學山（梅園）に承けて、之を帆足鵬卿（万里）に傳へし愚山が、偉人と偉人との間に於ける氣息の呼應は、亦其の偉大を見るに足る者あり、故に其の傳を立つ。（四九頁）（ ）は筆者の註、なお天囚がこの三偉人を知るきっかけをなしたのは、彼が記すように「丙午（明治三十九年）の秋十月予（天囚）の豊後別府に遊ぶや、（別府）町長日名（日名子の誤種）柚軒（太郎）東道たり、柚軒は好古の士なり、予が為に附近の名勝を引導周觀せしめて、昔賢先儒の遺蹟に及び、其の墓を訪ひ、其の故宅を尋ね、其の遺書を捜求して、梅園・愚山・万里三先生の事略を知ることを得たり、」ということ、日名子太郎（一八六五〜一九四〇）の引導・周施に負うところが大きかった。天囚は、「脇愚山」の頁の最初に、前述のような「伝を立つ」理由を解いている。

また大正元年九月には、『梅園全集』上・下卷（梅園会編纂・弘道館発行）が刊行されたが、下卷末には「梅園先生逸話集」が収録されている。全集の編纂に従事した藤井專隨の著であるが、その中の「梅園蘭室萬里」には、次のようにある。

蘭室は西学を学ばざりしを悔ひて、有用の学、志あるものの学ぶべきを主張せり、其教を受け其志を継ぎし者は實に帆足萬里なりとす、蘭室は之を梅園に承けて萬里に傳へしなり、萬里他日一部の字典を便として獨学遂に蘭書を読破し彼の窮理通の大著を完成し、西洋研究の先鞭を著けしは、学統上父祖二代の遺志を繼承して之を大成せしものといふべし、宣哉後日、米良東嶠の撰びし萬里先生の碑文に左の言ある也

夫れ学は辨倫を原ね、兼て物理を明かにし、智を開き務を成し、以て原生利用に資するもの、學山先生に基き、而して先生（萬里）に大成せり、

また東京帝国大学教授の高田眞治は「三浦梅園の學風と南豊の儒学」（『近世日本の儒学』所収、昭和十四年八月・岩波書店）の中で、「三浦梅園の学は、脇愚山を経て、帆足萬里に伝はった。故に次に愚山と萬里とに關して、略述することとする。」と

して、「塾則五条」等を掲げ紹介している。そして、

此の外愚山は西洋学を論じて、其の怪誕な處は学ぶべきでないが、「実測の術は、實に有用の学なり。志ある人は問ふべきにこそ。」（菑海漁談）と謂つて居るのは、新時代の学問に対する活眼を有するもので、此の風は亦梅園より始まり、而して萬里に伝はつて居ると謂ふことが出来る。要するに愚山は、梅園より萬里に至る学説の中継者として銘記されるべきものである。（四九七―八頁）

という。

また第七高等学校教授の武藤長平は、その著『西南文運史論』（大正十五年六月・岡書院）に於いて、

梅園と萬里との間に脇愚山がある。愚山は梅園のやうな独特の学識なく萬里のような博識と自信ともなく、しかし欠点少ない醇儒である。（中略）それで、南豊学界の大立物梅園の学風は綱齋・剛立によって醸成され耕牛、翠厓によって玉成され、愚山を媒介者として萬里の健翮によって全南豊に伝播されたといつてよからう。（二三八―九頁）とある。

ここにある綱齋とは、綾部綱齋（一六七六―一七五〇）のことで、少年時代に梅園が師事した。剛立は綱齋の末子で、梅園の学問上の無二の親友であった。梅園より十一才の後輩。耕牛（吉雄）・翠厓（松村）は、共に長崎の阿蘭陀訳詞。梅園は、安永七年（一七七八）八月三日家を出発し十月十三日に帰宅する再度の長崎旅行をしているが、帰後二巻の『帰山録』がある。その原本となった日記が残っており、長崎での吉雄幸作（耕牛）との交流がひんばんに記されている。

また横浜市立大学学長・日本科学史学会会長三枝博音は、万里九十年祭の記念講演（昭和十六年六月十四日）「帆足万里の学問及び思想」において、次のように述べている。

梅園先生の考えは実にすぐれた思索であります。之が発展して玄語・贅語・敢語となったのであります。こうした思想背景が萬里先生の哲学的背景となつて居ると思われるのであります。勿論脇蘭室先生を通じて行われたことは、考えてみなければなりません。梅園先生から萬里先生との間にある蘭室先生は詩文にたけた方であつて、科学や哲学思想が梅園から

万里へと流れてゆくそのみちとして、二人をつなぐ学問の流れのみちとしてはゆるがぬたしさが蘭室先生の文学・思想の中にあつたと思われるのであります（『帆足万里祭講演集』日出町立万里図書館）。

また筒井清彦は『脇蘭室』（昭和四十九年、豊岡小学校創立百周年記念行事事業達成会、『郷土大分の先覚者』上巻・昭和五十五年十二月・郷土大分の先覚者刊行会に再録）に於いて、次のように述べている。

江戸時代後期の儒者、教育者であるが、わが豊後の学問、教育の歴史の上では、承前起後の要（かなめ）の点に位置しておる。即ち先生は、いわゆる「豊後学」の祖、三浦梅園にその学問を受け、これを帆足万里に伝えたのである。（二二一頁）

また帆足万里の曾孫で、『帆足万里』（昭和四十一年五月、新装版は平成二年一月、吉川弘文館）や『帆足万里と医学』（昭和五十八年十一月・甲陽書房）の著者帆足図南次は、その著『帆足万里・脇愚山』の「序」に於いて、次のように記している。

江戸および京阪の文化圏からはるかに隔絶して、小藩分封のひずみもあらわな僻地の豊後から奇しくも近世の中・後期、三浦梅園・脇愚山・帆足万里の三学者が相前後して、世に出た。まず梅園が種を蒔き、愚山が受け継ぎ、万里にいたつた、とみられる歴然たる思想の形成こそ、日本思想史に占める極めて重要な一章でなければならぬ。

同書に於いて図南次は、万里に影響を受けた人々を紹介するが、その中の一人に中津藩の福沢諭吉をあげている。つまり、「万里門下の父（百助）」と万里の影響下の兄（三之助）を通じて、万里が間接に諭吉の学問的傾向の流れを引く思想を形づくる上にはかりでなく、生涯の運命を決定できるまでに、影響をあたえたといえないこともない（二五四頁）という（ ）は筆者）。

さらに、現在大分合同新聞論説委員の狭間久氏著『帆足万里の世界』（平成五年六月・大分合同新聞社）では、「三浦梅園の学問・条理学を帆足万里に受け継がす役割、それを脇蘭室がすることになるのである」（一四四頁）といい、「三浦晋（梅園）、の条理学を帆足万里の窮理学へ引き継ぐ役割を果たしたのが脇蘭室だった」（二一四頁）という。さらに「おわりに」の箇所

で、「三浦晋に始まった科学的・合理的な学問精神は帆足万里に受け継がれ、西洋の学問を取り入れることでさらに大きく発展した。それを一層大きなものにしたのが福沢諭吉である」(二四五頁)という。諭吉にまでつながる科学的・合理的な精神が、大分県独自の学問精神の流れであると結んでいる。

狭間氏はこれより以前、『大分県史』近世編Ⅳ(平成二年三月・大分県)に於いてこのことを解き(第一節二豊における学問・思想の展開)、「豊後学」の流れと特色を示している。氏によると「豊後学」という名称は、戦後松本義一(元大分大学教授)が言い出し、正式に提唱したのは佐藤義詮(しあき)(元別府大学学長)とされる。佐藤義詮著『学禁余稿』(昭和三十二年十月・明倫堂書店)によると、

大分県における徳川期以後の学問に一つの系統をつけて、例えば豊後学というような名前をつけて考えてみると、その系譜は、三浦梅園、脇愚山、帆足万里に及び、その後、万里の門にその父が学んでいることから福沢諭吉と伝わっていると考えてもいい。しかも、福沢諭吉の実用主義的な傾向とか、西洋の文化の受け入れ態度のなかには、直接連関は少しもないにしても、万里が西洋の科学に着目した態度のなかに一抹の相通するものがあるのである。

これまでの日本人がシナ思想によって、世界の在り方を考えて、ほんとうの意味での科学的な世界観をたてることに一向無頓着であった時代に、三浦梅園以後、豊後の人達が着目したことは世界の在り方を科学的に取扱おうとする勢力である。そういうピークの終りが福沢諭吉であり、西洋の文明と並行した理解の終点でもあったのである(「帆足万里」二六〇―二七頁)

とある。佐藤は、大分県に於ける学問の一つの流れを「豊後学」という表現を借りて説明し、三浦梅園から脇蘭室・帆足万里と受け継がれ、福沢諭吉まで伝わったとする。

狭間氏は『大分県史』近世編Ⅳで、

梅園は西洋の学問に共感を覚えたが、直接これを学んではない(中略)梅園に師事した脇蘭室(愚山)も西洋の学問に

着目したが、蘭学を学ぶには至らなかつた。豊後で蘭学に取り組んだのは蘭室の弟子の帆足万里である。万里は直接梅園に師事しなかつたが、蘭室を通じて梅園の科学的・合理的精神に触れたようだ。梅園の条理哲学「玄語」を正しく理解した最後の人が万里だった。(三七二頁)注③
 といい、

帆足万里は科学的、合理的精神とともに実学を尊んだ。つまり算数と算盤まがはの重用である。この万里の実学を喜んだのが福沢諭吉である(中略)この福沢の進取性、合理性、実学重視、ここに「豊後学」の精神が大きく結実していると見られるのではなからうか。(二七三頁)
 という。

また三浦梅園研究会の小串信正氏は『梅園外伝』(昭和六十三年三月・三浦梅園研究会)所収の「協蘭室」に於いて、「偉人梅園の条理の哲学を一世の大家帆足万里に伝える大きい功績を挙げたのである」(七三五頁)という。

なお、広瀬淡窓が西洋の学問についての程度理解していたのか浅学にして知らないが、『懐旧樓筆記』には、次のような記事がある。天保十五年(一八四四)九月府内(大分)へ行くため家を出発し、城内で藩主を始め諸氏に論語・左伝を講じている。その十九日条をみると、

十九日、安藤春臺カ招ニ應ス、(中略)春臺ハ蘭方ノ醫ナリ、其席ニテ、始メテ舶来ノ蘭書ヲ観タリ、蟹行左文ナリ、予詩アリ、曰ハク、

新種西湖柳 清陰已藹如

庭中羊臥石 案上蟹行書

客滿題レ詩處 身閑鍊レ葉餘

憐君稱「博物」 奇論數開レ予

とある。

この項では、蘭室の功績・役割を先人たちがどう評しているのか、つまり師梅園の学問を万里に伝えた点を高く評価していることを述べてきた。最後に一つだけ、前述した先人たちと異なる説を一つだけ紹介しておきたい。

『稿本窮理通の研究』・『三浦梅園の思想』（ベリかん社）・『三浦梅園』（明德出版）等の著者で、国士館大学教授の高橋正和氏は、「梅園学から万里学へ」（『国士館大学武徳紀要』第五号所収、昭和六十三年六月・国士館大学武徳徳育研究所）の中で、この頃の最初に紹介した田口正治の結論とおよそ相違する結論を得ている。

高橋氏は本論文作成より十数年前に、一巻本窮理通（写本）を杵築公民館の倉庫中より偶然発見している。天保七年（一八三六）丙申春三月の日付のある『窮理通』の「自序」で、「予ノ壮ンナリシ時、『窮理通』数万言ヲ著ハセリ。蘭室先生、為ニ序ヲ作りシ所ナリ。己ニシテ、其ノ多糺ナルヲ以テ之ヲ毀チタリ。」とあるそのものが、前述の一巻本窮理通であるという。

高橋氏は前論文の本論で、一巻本窮理通の内容を梅園の名著と比較・分析することで、次のように結論している。

以上のような六種の資料をつぶさに検討することに依って、私は梅園学から万里学への流れの中に、すでに略述しておいた様な新しい結論を得た。

それは、昭和十八年に矢島祐利先生が『科学史研究』第七号に於いて推断した結論、即ち

此の初稿『窮理通』は如何なるものか、今日知ることを得ないが、恐らく梅園の系統に立つ条理の学であったと思われる。

という結論とはおよそ相違するものであった。

又、吉川弘文館が刊行した『三浦梅園』人物叢書の中で田口正治先生が断定した結論、即ち

梅園門下として別に一家をなしたものが、脇蘭室である。特に蘭室の功績としては、梅園の学問を一世の大家帆足万里に伝えたことであった。万里は蘭室を中継者として梅園の志を継ぎ、渾身の努力を傾注して『窮理通』を著したのであった。

とする田口正治博士の結論とも、およそ相違するものであった。つまり、万里学には梅園学の本質的中核を形成する条理哲学の要素が、万里にとつては最初の窮理学の書であった『一卷本窮理通』に於いてすら、全くと云つて良い程に欠落していた。

二、脇家の祖

1、向上の志、その根源は

蘭室の少年時あるいは成人の後も、心のささえ・精神的支柱となつたのは、一に南朝の忠臣を先祖に持ったという自負心であつた。

西村天囚は『学界の偉人』に於いて、

愚山の家系は南朝の忠臣脇屋形部義助に出づと伝えらる。義助四国に死せし後、其裔八郎次郎に至り、天正中乱を避けて豊後に入り、小浦に隠れて子孫連綿たり。愚山の宗家は今猶脇屋と称し、旧時幕府の旗本なる新田氏とは嫡庶の交を為し、小浦の庄屋をも勤めて、苗字帯刀を許されたりとぞ、愚山の家は次男家なるを以て、本姓脇屋を修めて脇と名乗りしが、其の先南朝の忠臣に出でしと云ふ一事痛く愚山の心を鼓して、幼より向上の志を発せしめたるが如し（五十頁）

という。

また筒井清彦は、



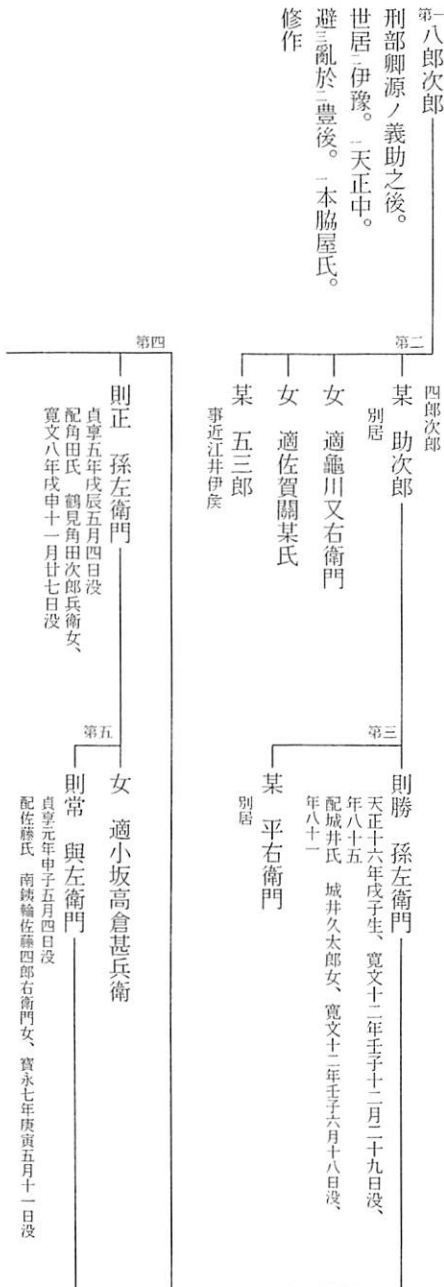
新田義貞の弟脇屋義助の墓

(愛媛県今治市国分)

先生の家は父が養子分家で脇屋を節して脇と称したが、豊後小浦の脇屋氏は南北朝時代の南朝の忠臣である新田義貞の弟で最後まで南朝に忠節を尽くして伊豫で討死した脇屋義助の子孫が乱を避けて伊豫より渡来したと伝えられている。この家門の伝承は先生の学問思想に決定的な感化影響を与え、生涯目に見えぬ志操の指針となり、心魂の支えとなったように見受けられる。(『脇蘭室』二一五頁)

2、家系図より

脇氏系図



某 次郎兵衛
居立石

某 長助
別居

女 適頭成衛藤太左衛門

則信 五兵衛後更孫左衛門
別居

第六

一郎 早世

某 與右衛門

玖珠郡旦村人、則常養子、貞享四年丁卯十二月十九日没、
年二十四
配 名佐那、則常女、貞享五年戊辰正月十二日没

第七

與三郎 幼穉

貞則 時右衛門

則信第三子、承 宗家、正德五年乙未九月廿一日没、
年三十六
配松井氏 名頼、府内庶臣松井源兵衛將勝女、寶曆八
年戊寅正月廿二日没、年八十

女 名久、元禄十六年癸未四月八日幼没

女 名市、適頭成衛藤傳兵衛

則房 孫之丞、正德二年二月十二日幼没

諦則 幼字龜三郎、更儀助、老稱新左衛門

寬永五年戊子八月五日生、安永四年乙未七月九日没、年六十八
配尾林氏、名多久、讃岐高松人尾林八郎右衛門智定女、寬政五年癸丑四月十二日没、年八十三

女 名登惠、適杵築侯醫師飯塚玄道

則親 嘉左衛門、後號咩山

女 名友、享保六年辛丑二月十二日幼没

則彌 儀左衛門、後更儀助、晚更新左衛門

享保十二年丁未十一月廿六日生、寬政七年乙卯五月十一日没、年六十九
配淺野氏、名也會、大坂醫淺野昌軒女、天明六年丙午八月三日没、年四十
後配仲村氏、名智世、岡人仲村武真女、寬政九年丁巳十一月十一日没、年四十七

女 名須賀、諦則養子則郷妻、享保十七年壬子正月十五日生

則郷稱總左衛門、豊前椎田人井上清藏親房子也、寶曆十三年諦則養爲子、明和七年庚寅十月廿九日没、年四十

則友 登久助、後稱是芳、享保十九年甲寅十月廿日生、爲則親養子

榮藏 元文五年庚申六月十三日幼没

三郎助、號瀧直、寬保二年壬戌正月

諦渠 二日生、寶曆十二年壬午三月七日没、年二十一

女 名與志、幼没

女 名幾、適高田源助親章

則久 禮助

安永元年壬辰十一月生
娶神屋氏、名會惠、府内侯醫師神屋貞菴女
母仲村氏、七年乙卯八月爲長之養子

哲 幼字哲吉、寬政五年癸丑二月十九日生

長之 儀一郎、則郷子、則郷没則彌養爲子、(蘭室)

後別居、宝曆十四年甲申五月十二日生

女 名誠、適杵築島彌一郎永胤

右記の「脇氏系図」では、「八郎次郎」を第一とし、それ以前を記していない。注書きの様に形部卿義助の後裔として伊予に代々住していたが、戦国乱世天正年中（一五七三〜九二）に戦乱をさけて豊後に渡り、そこで根を張り後世庄屋となり苗字帯刀をも公許されたのであった。

蘭室は本家に協力して豊後初代の八郎次郎の碑銘を撰し、墓碑を建立した。『脇蘭室全集』所収の「家説考」や「鎌倉五郎入道正宗刀伝来聞書」などを合わせみると、脇屋の先祖が若干見えてくる。

寛政七年（一七九五）十月著作し、文化五年（一八〇八）

一月校正した「家説考」には、「脇屋左衛門佐羽黒山に蟄居し後に伊予に移て卒居の事」と題する一文がある。「大日本史・太平記・予陽盛衰記・輿地図・南海治乱記」等を考証して、また伊予の人に聞いたりして先祖の活動を考察し、新田宮にも言求している。そして、「脇八郎次郎伊予より豊後に渡海ありし事」を記す。ここでは師の中井竹山の著『逸史』や新井白石の『藩翰譜』などを検討しているが、「今按ずるに、明徳四年（一一三三）義治伊豫に移り玉ひしより、天正元年迄凡百八拾年なり。此間義治より八郎次郎に至る迄の世次知るべからず」とある。先祖よりの伝承もなく、博学蘭室の調査によっても、この間の事歴は明らかにできなかった。

次に「正宗刀の事」を記す。宗家の重宝に「正宗」があり、伝承によると「赤松円心より後醍醐天皇に献上された名刀で、これを脇屋義助に下賜され、その子義治より子孫代々家宝として受け継ぎ、八郎次郎が豊後に持参した。それを豊後の領主大



八郎次郎の墓

友氏が聞きつけ懇望し所持していたが、大友氏の滅亡時に玖珠の野上某が手に入れ、しばらく玖珠郡野上村に在った。これを八郎次郎の孫則勝の末子則信がさがし出して購入した。そして宗家では、兄則正の子五世則常には男子が早世したため、一人娘（佐那）に玖珠郡旦村（九重町大字右田上旦・下旦）の人「與左衛門」を婿に迎え、六世とした。しかしこの人は、貞享四年（一六八七）十二月十九日二十四才の若さで死去した。また妻の佐那も翌年一月十二日、後を追うかの様に没した。そこで前述の則信の三子貞則が宗家を継ぎ、正宗を再び宗家の重宝とした。

正宗は貞則の子諦則の少年時、久留米藩二十一万石の初代藩主有馬豊氏がこれを望み宗家に交渉したが、堅く辞して献じなかったといういわれのある名刀。「鎌倉五郎入道正宗刀伝来聞書」（『脇蘭室全集』四六三〜四頁）という一文は、天明三年（一七八三）七月四日蘭室二十才の時、大叔父岬山老人脇則親（七十才）の口述を書き止めたものである。それによると、岬山の母の物語として、緋威の鎧一領も伝来していたが、これは正徳四年（一七一四）十二月十三日の火災で土蔵も焼いて亡失したとある。

なお有馬氏は、その先祖が赤松円心に繋がるとして正宗を強く希望したが、正宗は「長宗・来國次・来國俊・来國光・大和包永・左文字・一文字」などと並ぶ天下の名刀で、贈答儀礼用としても珍重された。例えば寛永十八年（一六四一）八月三日江戸城に若君（四代將軍徳川家綱）御誕生を祝し、同九日諸大名は「御七夜」の祝儀を献上している。その「御道具大小銘付」には、松平肥前守利常（加賀・前田）が大刀として正宗を、松平新太郎光政（備前岡山・池田）が小刀として正宗を献じている（『御当家紀年録』児玉幸多編・集英社）。

また「家説考」では、「新田郡旧跡の事」として上野国新田郡の解説と、脇屋村の存在やそこに正法寺（真言宗）という寺があることなどを記す。正法寺は正法寺殿という脇屋義助の法名からとった寺名で、石碑があると高山彦九郎から聞き書きしている。

彦九郎は脇屋（谷）村から二里離れた細谷村の人で、寛政四年（一七九二）十二月蘭室を訪ねて豊後にも来た。蘭室は彦九

郎の談に心を躍らせ、先祖に思いを馳せ、「猶よく訪求すべし」といい、また「伊豫国旧跡可追考」ともいい、「日本與地図」・「豫陽盛衰記」を考察している。蘭室は、できればこれらの地を訪れ、先祖の事跡をもっと探求したかったものと思われる。

3、麻生春畦との関係

日田が育んだ天下の碩学広瀬淡窓の親族（伯父平八の娘イサの次子）で、その高弟でもある館林（相良）伊織は、文化八年（一八一二）二十才の時玖珠郡旦村（現九重町）の医師麻生春畦（まゐ）の養子になった。そしてその妻に、淡窓の妹那智が二年後の十一月十七日に嫁するのである。

淡窓の『懐旧樓筆記』（『淡窓全集』上巻）天保十三年（一八四二）二月九日条によると、伊織の養父春畦のことを「此人若キ時、藪孤山ノ門ニ入り、少シク文字アリ、篤ク性理ノ学ヲ信シタリ」（五九一頁）とある。孤山の弟子ということは、蘭室と同門である。

前述の脇氏系図中にある宗家第六世を嗣いだ「與左衛門」が、玖珠郡旦村の人であることと、何らかの関係があるのではないだろうか。今のところ麻生氏の系譜等で確認できないが、互いの先祖が関係しているように思える。

蘭室の「日識」によれば、寛政七年（一七九五）三月十八日蘭室三十二才の時、春畦は小浦に来て投宿し、四月五日になって玖珠に帰っている。そして二十日には、春畦よりの書と書写した「贅語（ぜいご）」（三浦梅園著）がもどって来たことを記し、同年十月十六日及び寛政九年十月十八日にも、春畦より書信があったと記す。

なおついでながら、淡窓は「多年学業相励、世上手広教授致シソロニ付」ということで、天保十三年（一八四二）十一月幕府から正式に苗字帯刀を永々許可されている。そのことを『懐旧樓筆記』の中で、次のように記している。

當縣初ハ諸侯ノ國ナリシカ。後ニ公領トナリテ。已ニ二百年ニ近シ。支配ノ地。時ニ増減アリ。多キ時ハ七八萬石ニ及ヘリ。其内ニテ。土人ニ苗字帯刀永、御免ノコト。嘗テ舊例ナシ。百年前。土民黨ヲ結ヒ。上ヲ犯スコトアリシトキ。莊

屋二人功ヲ立ツルコトアリ。苗字帶刀ヲ許サル。帶刀ハ其身ニ止リ。苗字ハ子孫ニ傳フヘシトナリ。今ノ千原欣右衛門カ家。其一ナリ。近年ニテハ。草野忠右衛門三世苗字ヲ許サレ。家弟久兵衛ト。小迫藤左衛門ト。一世苗字ヲ許サル。其他遠境ニハ。小浦ノ和喜氏、乙津ノ後藤氏。世ニ苗字ヲ稱ス。外ニ其類アリヤ。聞キ及ハス。豆田隈町ノ年寄。及醫師ノ苗字ヲ稱スル。皆私ニ用フル所ニシテ。公許アルニハ非ス。

右によると、小浦の和喜氏（脇）の苗字は、幕府から公許ある歴としたものであった。

春畦は右田村・上旦村・見良津村庄屋の麻生家一族で、当時郡内有数の資産家であった。幕末風雲動乱の中で幕府は、元治元年（一八六四）八月第一次長州征討を企てた。幕府領内では「稊・杳・草鞋・大豆・味噌」等の徴収が割当てられ、「長州征伐軍用金」が玖珠郡内にも五年賦の上納で命ぜられた。

玖珠町大字山田の梅木正嗣氏所蔵の「元治元年十月、長州征伐軍用金割付帳」によると、郡内の有志がそれぞれの分限に應じて上納しているが、郡内の最高額は小田村の武石儀策で五百五十両、次は中山田村の梅木平左衛門・後野上村の佐藤左衛門・書曲村の帆足茂助・右田村の麻生恒次郎の各五百両である。ちなみに、右田村庄屋（麻生）寛蔵は四十両であった（『玖珠町史』上巻・平成十三年・玖珠町）。

三、学に志ざす

1、学問のはじめ

孔子は「吾十有五にして学に志し」（『論語』為政第二）といったが、西村天囚によると蘭室は、「学問をもて身を立んと決心したるは二十比なるべし」（『学界の偉人』五三頁）という。

蘭室が学に志ざすまでを、「見し世の人の記」（『脇蘭室全集』所収）によって見ていきたい。同書は蘭室四十二才の文化二年（一八〇五）九月末に起稿し、翌年初夏に完成した。

蘭室十二才の頃「おほぢなりし人（則親）のかたへにありて、我國のいくさ物かたりを聞たること年ごろのことなりし」とあり、源平の争い・太平記以降のことや関ヶ原合戦など、「心にとむる所多かりし」とある。その後母のいとこで長崎奉行所の役人であった小比賀時胤より、「四書の集註一部をあたへられ、素読せしことありしが、片田舎にてはかゝしき師もなかりしが、やがて文字の読ごへをもしれぬ。されどその後このふみを本としてよみ得たれば、その賜物は大なりといふべし」とある。小比賀氏の元で四書の集註を与えられ、素読をした。小浦には名のある師もいなかったが、この人のお陰で何とか、書物を読むこともできるようになったという。

また「学問といふ事さへ辨へしらぬ頃なりし」時、大おぼの妹婿杵築市八坂の八坂手捌大庄屋島清斎（諱は義見、通称清右衛門・蘭臯と号す、一七〇八〜一七八一）翁の物語りを、次のように伝えている。

我をさなくして、人と物がたりするをきかれて此子は学問させざることこそ惜しむべけれ、よき師にしてたがはゞ器をやなすべきといはれけるが、学問の事さへ辨へしらぬ頃なりし。

この子に勉強をさせないのは、誠に惜しい。立派な先生に就学させたならば、きっと大器となるであろうと。

蘭室の祖父脇屋諱則の妻（多久）の妹（律）が、清斎の妻。この人の孫が弥一郎永胤（君社）で、のち蘭室の妹

（誠）がこの人に嫁している。永胤は『蘭室集略』全十二卷十二冊の編集に努め、文化四年（一八〇七）春完成。

「豊後協長之子善著、妹婿島永胤君社揖。門人帆足萬里



枯れ枝や雑草に覆われた島永胤の墓
（杵築市本庄千光寺の裏山）

鵬卿校」とあり、蘭室の詠詩九百七十三首と百六十の文章が収められている。文化九年九月初版が刊行され、師中井竹山の序文と巻末には竹山の子蕉園と帆足万里並びに高木紫溟の跋が添えられている。また『蘭室先生集略統編』（全八巻・四冊）も編集した（『三浦梅園外伝』参照）。

大器をなした人にはこのような逸話がよくあるもので、時習館の初代教授秋山玉山の場合は、生母が一夜夢に富士山に登るを見て玉山を妬んだという。『大分県人物志』所収の「秋山玉山」によると、

初め母篠田氏。一夜夢に富獄に登るとみて、玉山を妬み又生るゝに先つ三月、腹中に弧聲を聞けりと。玉山生まれて穎悟、舉止群童と異なれり。邑に老儒あり、一見大に奇として曰く、「後年大儒たるもの、此の児にあらざして誰ぞ」と。（一三二頁）

とあり、また

常に人に語りて曰く、「吾少より三願あり、富獄に登ること、学館を建つること、而して二願既遂げたり」と。人其の一を問ひしに、終に笑うて答へざりきといふ。蓋し詩集版刻のことなりしといふ。（一三三頁）とある。

2、詩の一端を伺う

父の兄で曹洞宗禅興院（福岡県行橋市大橋）の住職萬堂和尚（諱素心）よりは、蘭室十七才の時に「唐詩選の聞書せしをあたへられし」という。和尚は少年時江戸にて、「唐詩選」の著者古文辞学派の儒者服部南郭（一六八三〜一七五九）に学んだ人で、「はじめて詩といふものの端をうかがひぬ」とある。蘭室は十七才で、初めて詩の一端に触れたのである。

ちなみに広瀬淡窓は七才にして習書を事とし、考経の句読を父より授かる（読書始め）。考経を終って明年にかけて四書を授かり、八才の冬近くの豆田町長福寺住持の法幢上人より、詩経の句読を受けている（この年三月十四日、三浦梅園死す）。

十才の時、久留米の浪人松下西洋が日田隈町に来て文学を教授したので、この人の弟子となり詩を学び、一日に七絶一首をもって課題とした。

また同時に日田市東町広円寺の法蘭上人（一七二八〜九四）にも会い、教えを受けた。この人は、江戸に上り服部南郭に学んで詩名が高く、当時文壇に於ける一名家であった。『蘭室集略』卷之六には、「寄法蘭上人」この七言絶句もあり、「年譜」の寛政五年（一七九三）四月二日（三十才）には「法蘭より来書」とあり、蘭室との交流が伺われる。

そして淡窓十二才の時には、父桃秋（三郎左衛門）と親交のあった高山彦九郎が日田に来て、淡窓が一日百詩を詠せしを知り、和歌を贈ってその才子を賛えた。

仲（淡窓）、秀才の唐歌うたいける嬉しさに読みて遣しける、正之（彦九郎）

大和には 聞くも珍し 玉をつらね

ひと日に百のモモ唐うたの声

淡窓三十四才の文化十二年（一八一五）三月九日の条をみると、

三月九日。肥後ノ脇義一郎ノ死ヲ聞ケリ。此人豊後小浦ノ産ナリ。其若キ時ヨリ。先考之ヲ熟知シ玉ヘリ。常ニ其人トナリヲ稱シテ。予ヲシテ學ハシメントノ志有リシカトモ。果サス。予十一二歳ノ頃。詩數首ヲ以テ其筆削ヲ乞ヘリ。脇モ又一絶ヲ以テ。予ニ寄セタリ。其ノ後兩三年ヲ過ギテ。國字牘ヲ余ニ寄セタリ。其中ニ曰ハク。近京師ニ至レリ。人盛ニ足下ノ名ヲ傳フル者アリ。且曰ハク。飛驒ノ國ノ人ナリト。余乃チ飛驒ハ日田ノ誤リナルコトヲ辨シ。予カ同國ノ人ナルヲ以テ。之ニホコレリ。足下少年ニシテ名ヲ發スルコト如レ此。務メテ大成ヲ期セスンバ有ルベカラス。但シ慎ンテ明季ノ學風ヲナスコト勿レ。之ハ輕薄ノ病ヲ生スト云云。此人後年肥後ニ聘セラル。其ノ後ハ消息ヲ通ゼズ。歿スル年。五十餘ナルヘシ。（『懷旧樓筆記』）

とある。

脇義（儀）一郎こと蘭室の死を、三月九日に聞いている。彼の死は、実際には前年十月三日（陽曆十一月十四日）肥後領飛地鶴崎のことであった。蘭室の死をすぐに知らなかったのは、前述のように三十五才で熊本時習館の訓導として赴任して以降、お互いに消息がとだえていたためであろう。

なおこれより以前、文化十年閏十一月条をみると

杵築ノ郡奉行三浦主鈴、當官府ニ事アリ、君命ニヨリテ来リ、我家ニ留ル、予相見セリ、主鈴ノ父ヲ安貞ト云フ、梅園先生ト號ス、有名ノ儒者ナリ、歿シテ巴ニ久シ、安貞ハ二子山ニ隠レタリ、主鈴ニ至ツテ杵築侯ニ仕へ、儒者ヨリ奉行ニ轉シタリ、主鈴男子ナシ、往年予カ門人相良茂ヲ義嗣ニセントテ、高田ノ賀求泰庵ニ託シテ之ヲコヒ、数度予カ家ニ往復シ、事己ニ成ツテ後、又クヅレタリ、主鈴モ文学ニ長セリ、書跡尤美ナリ、此人数年ノ後歿セリ（『淡窓全集』上卷、一八七頁）

とあり、修齡とは交流も深く遠戚にあたる高弟相良茂を、義嗣として出す話もできていた。注④

また翌年二月十六日の条には、

相良茂、新原ノ兒玉玄龍・義嗣トナリテ、彼ノ家ニオモムケリ、茂予カ成章舎ニ在リシ時、十二歳ニシテ入門シ、ココニ至ツテ九年、歳二十ナリ、才氣群ヲ出、當時諸生ノ冠タリ、杵築ノ三浦氏、其名ヲ聞イテ、請ウテ嗣トセントセシカ、事ナラス、ココニ至リテ、兒玉氏ヲ嗣ケリ、（同、一八九頁）

とある。さらに天保十三年（一八四二）六月四日の条には、

杵築の使臣三浦多一郎来リ見エタリ、存山先生梅園ノ曾孫ナリ、存山ノ子脩齡ハ、余當テ相見シコト、前ニ出セリ、脩齡子ナシ、予カ門人相良茂ヲ請ウテ義子トセントシカ、其事果サス、他方ヨリ義子来レリ、多一郎は其子ナリ、今奉行職ニ任ス、帆足鵬卿（万里）カ門人ナリ、亦文辞あり。

とある。

淡窓は蘭室との交流よりも、むしろその高弟帆足万里の方が頻繁で深かった。注⑤ 万里は淡窓より四才上で年齢も近く、その両親ともすでに交流があり、またお互いの子弟間交流もあった（蘭室は淡窓より十八才上）。

淡窓の文によると、蘭室のことは若い時分より先考（父）の方が熟知しており、その人となりも立派で学問に優れ、機会があれば自分をこの人に就学させたいと思っていたが、果たせなかったという。淡窓十二才の頃、つまり一日百詩をなす頃、詩数首をもって蘭室に添削を乞うている。脇もまた一絶をもって、返書した。

その後三年を過ぎて「國字贖」を送ってきた。その中に、近頃京都で人々があなたの神童ぶりを盛んに宣伝している。務めて勉学に励み、身をつつしんで大成を期してほしいとあった。

ちなみに蘭室三十三才の「年譜」をみると、寛政八年（一七九六）二月八日大坂へ向けて船出し、三月四日大坂に着き、師の中井竹山に謁した。そして同月二十六日には竹山と告別し、四月二日小浦に帰着した。九年ぶりの再会であった。「近京師ニ至レリ」とはこのことで、十八才年少の同国人である淡窓の高名を京で聞き、誇らしく思った。なおこの「國字贖」なる書が如何なる物か判明せぬが、今なお大部の資料・書物が大切に保管されている「広瀬先賢文庫」内に、残されていないか興味のある所である。

また蘭室の師三浦梅園は、いつ頃詩を学び始めたのであろうか。梅園二十一才の詩集『独嘯集』の自序によると、「予十五ニシテ詩ニ志ス・・・語ヲ作ルコト数千言。然レトモ窮郷下邑、与ニ詩ヲ言フベキ者無シ」（『三浦梅園』田口正治著、四五頁）とある。

蘭室が言うように、速見郡小浦では「片田舎にてはかくしき師も」いなく、また梅園に於いても国東富永では村も貧しく、文芸・学問に恵まれた土地柄ではなかった。共に詩を論ずる、友人・先輩もいなかったという。

この点淡窓の場合は、日田が九州天領の中心地であり各種の情報・人材が集まり、生家も経済的に豊かで（諸藩の用達も務める豪商）、また学問をする上での条件・環境が調っていたことは、淡窓にとってこの上もない幸せであった。

3、熊本へ遊学

「年譜」の天明四年（一七八四）春の頁には、熊本に遊学し藪孤山（五十才）の門に入り、また詩を伊形靈雨に学ぶとある。そして同年十一月には帰郷している。「見し世の人の記」によると、「此先生（孤山）の人をさとされしは、もの毎につばらにしめさるゝ事はなくて、その機にふれて知をひらかるゝことの、世の事ならず覚えたりし」とあり、その逸話を紹介している。

そして次に、三浦梅園については、次のように記している。

●三浦安貞先生をはじめて訪ひたりしは、予が二十二の春なりし。杵築の城下を出て、山路をわけ行こと三里餘り、ふたごの山のほとり富永といふ所に草庵あり。調エツを通じて、久しく先生の大名を仰ぎ慕うよしを述けるに、謙厚の老師出迎られ、袴コ接あり。愚拙も此山中にてはまことに學者にてさふらへども、世間におし出しては、いかで學者と申さるべきとありけるにて、先君子の人としられていと尊かりし。數日滞りて物語を聞しに、教誨ウチガヒのあつき、今に至りて耳になす。その後も再度訪ひゆきて、條理の説の著述をもしばしは聞つれど、世の事しげきにまぎれて、従ひ遊



三浦家墓地と三浦梅園の墓（覆い屋）

ぶこともころに任せず。やがて死生を隔たりし。その子修齡、今は杵築にみやつかへして文學たり。しばし予が鶴磯の庵を訪ひ、先生の遺物を校せらる。予も又先生の辱知に酬ふるの志にて、もろともに考訂の事をなすに、そのかみまのあたり聞にしことなど思ひ出られて、懷舊の情いと切なりき。

梅園にはじめて会つたのは、蘭室二十二才の春（梅園六十三才、死の四年前）。好学の精神に燃える青年蘭室が、梅園のご高名を久しく慕つてここにようやくお会いすることができた喜びを申し述べたところ、梅園は袴をはいて客として親しく接してくれた。「私も此の山中では学者と人から言われているが、広い世間に出たならば何で学者と言えようか」と、いたって謙遜して言われるその言葉に、真君子としての人と成り尊く思い、数日滞在して教えを受け親しく教誨にあずかった。

その後も再度訪問して条理の説・著述のことを聞いたが、他事にまぎれて再び訪れることも出来ず死生を隔ててしまった。子は修齡といひ、杵築藩に仕えて時々自分の庵に来て、共に遺著を校訂したとある。「年譜」によると、享和三年（一八〇〇）蘭室四十才の「三月十日三浦修齡來宿、十一日修齡と共に贅語を校す、十五日贅語校了、玄語を校す、十八日三浦修齡辞去」とある。

梅園と蘭室との交際はわづかではあったが、梅園の晩年自分の学問的後継者を捜していた梅園にとっては、蘭室の存在が頼もしく思ったに違いない（修齡と蘭室は同年生）。

『脇蘭室全集』に、梅園が作った蘭室に関する詩四首が収められている。また『梅園詩集』天明五年（一七八五）の所に、「初メテ脇子善ニ逢フ」の詩がある。

白鶴峯陰海岸口

老蚌多年無人剖

今朝試向水底探

中有明珠大如斗

白鶴峯の陰、海岸口

老蚌、多年、人の剖くなし

今朝試みに水底に向かつて、探れば、

中に明珠あり、大は斗のごとし

△白鶴峯（鶴見山）のかけ、海岸口の老蚌（オールド）を長い間、だれも割かなかつた、今朝、試みに水底に向かつて探すと、中に北斗七星のように大きな明るい珠があつた。『帆船万里の世界』十三・四頁）

梅園は蘭室の人となりに接して、学力の非凡さを察知し彼を「明珠」とみたのである。

蘭室は少年の頃から西洋の学問に興味を持っていたようで、文化四年（一八〇七）五月から六月にかけて記した『苗海漁談』に、「少年の時、天文地理は西洋の学最精しと思ひ、師を得て学んことをねがひけれども、善師に遇わざりし」とある。

蘭室は天明六年（一七八六）再度梅園を訪れ、教えを請うた。別れた後、梅園に「冬夜、憶ふ脇子善」〔梅園詩稿〕がある。

雪後ノ青天白鶴ノ峯、美人夜對ス玉芙蓉、芙蓉隔レテ水ヲ人如レシ玉ノ、不レ得ニ瑤臺ニ迎レテ月ヲ逢フコトヲ

雪の後の晴れわたつた晴天に白鶴峰（鶴見山）があり、聖人が夜玉のような芙蓉（はずの花）と向かいあつてゐる。はずの花は水を隔て、人は玉のようである。仙人のいる台に月を迎えて、逢うことのできない自分がある。梅園は蘭室を「玉のよう」と称え、白鶴峰や豊後富士とも言われる由布山（玉芙蓉、淡窓は豊芙蓉と称した）の麓に住む蘭室を、群鶉の一鶴・明珠とみたのである。豊の名山鶴見山・由布山は相對し、その高さを競つてゐる。冬の夜、窓の外の月を見ながら、逢うことのできない現実を憶つてゐる。

蘭室は梅園に、手紙で教えを乞うてゐる。それに対し梅園からは天明六年（一七八六）十月十六日付の「答フニ脇子善」〔原漢文〕〔梅園全集〕下巻）があり、それによると、

晋ハ孖溪ノ水ヲ飲ミ、孖山ノ田ヲ耕シ、優遊シテ生ヲ遂ゲ。一トシテ長技ノ以テ人ニ、献ズル無シ。足下犬馬ノ齒（年長）

ヲ以テ之ヲ棄テズ。実ニ敢テ當ラズ。然レドモ書中言有リ。曰ク、身ハ天地ニ託スレドモ託スル所ノ何物為ルカヲ知ラズ。

舊々深媿（ゴウゴウシンキ）（よくわからず深く恥ず）ス。此レ則チ我が宿癖（シュクヘキ）（永い疑問）ノ存スル所ナリ。託スル所ヲ知ル可カラザレバ、

則チ託ス者ハ何ゾ知ルベケン。唯世、滔々（トウトウ）（おしなべて）トシテ己ヨリ天地ヲ觀ル。是ヲ以テ天地ニ合セズ。足下如実ニ

此ノ憤アランモ、姑ク回典ノ説ク所、先達ノ論スル所ヲ舎ヨ。反観合一、徴ヲ天地ニ取ラレヨ。条理ハ恰然（うちとけ）トシテ氷釋スレバ、則チ世ノ悶悶（思いなやむ）タル者ノ実ニ悶悶タルヲ知ラン。（以下略）とある。

なおこの手紙の末尾には、黄鶴が大坂の西洋天文学者で医者（イサナリキ）の麻田剛立（一七三四〜九九）のもとから帰ったことを報じている。剛立は字で、号は正庵。綾部綱斎（アヤベケイサイ）の末子（ウヂコ）安彰。梅園の学問上無二の親友で、梅園より十一才後輩である。黄鶴は父に代わって剛立のもとに行き、天文曆数に関する所見を質したのである。『玄語』や『贅語』の稿成る毎に、これを送って剛立の所見を求めている（『三浦梅園外伝』参照）。

4、大坂に遊学

二十四才の天明七年（一七八七）十月、大坂へ出て天下の懷徳堂主中井竹山（一七三〇〜一八〇四）にも、半年ほど教えを受けた。「見し世の人の記」には、次のようにある。

●竹山先生に従ひ遊びしは、予が二十四の年にて、浪華の懷徳書院に寓居しけり。先生殊さらにもぐみふかく、誨導いと厚かりし。はじめの程は諸生の寄宿せる舎中に在けるが、かまびすしきをいとひ、先生の宅の餐霞樓とて、嫡子淵藏書を讀む所ありしに向居し、半年ばかりを送りし、冬夜のながきころは、淵藏兄弟その他の良朋兩三輩打あつまりて物語し、ふけ行をしらざりしことしば〜なりき（中略）

淵藏は文才天が下に秀たる人なりし。一夜十賦とて、一夜の内に賦十篇凡一萬字ばかりの著述あり。兩夜にて二十賦を作れり。予が許にも贈りて珍藏しけるが、さき頃世を早ふして、これらのふみども永きかたみ草となりにき。なにはより歸りし年、此人の許へよみて遺しける歌。

いつかまた ともにながめむ 難波江の

梅が香ふるき おぼる月夜を

●竹山先生の京都に赴かれしに従ひて、淀舟の中に燈かけ唱和の詩を作りしが、先生の筆今に存せり。此時先生は大村氏に宿りて五七日滞留あり。予は宮氏に宿りき。此年大嘗會の禮行はれける。其翌年又京都へも遊て、しばし滞留せまくおもひけれど、四條あたりより火出て大なる災をなし、京中みな焼たれば、浪速より直に船出するといとま申ける時に、難波江の よしとあしとも わかぬ間に

歸るぞつらき こゝろつくしに

とよみければ、先生のかしに、

よしあしも わかぬなにはの きしによせて

こゝろつくしに かへるなみかな

最初は懷徳堂（攝津国尼崎町、現在の兵庫県尼崎市の道明寺屋吉左衛門宅に設置された漢学塾）の諸生用寄宿舎に住んでいたが、直に先生宅の嫡子が住む書齋で同居することになる（先生から目をかけられての特別待遇）。竹山が京都に行くのも同行を許され、その翌年も同行した。そしてしばらくここで滞在したかったが、京都で大火がありやむなく小浦に帰郷した。その際の和歌が、前掲のものである。

浪波（大坂）つまり懷徳堂に遊学し、自分は未だヨシ（善し）とも葦（あし悪し）とも分別できない間に、つくし（つくし筑紫）九州）に帰ることになってしまった（心残りである）。

善しとも悪しとも分からぬこの自分のところに寄り来たって、心を尽くして学問に精を出し、君は今九州に帰っていく（また浪波の岸に、何度も打ち寄せてほしい）。後年蘭室の高速の弟子帆足万里も、のち竹山に入門するのである（後述）。

蘭室の詩文集『蘭室集略』の「序」で、竹山は多忙の中を寛政十年（一七九八）七月、弟子のためにこう書いている（大坂竹山居士中井積善撰）。

予知其穎悟超群也、知其重厚寡^か、爲徳人也、知其学淵而識卓、無偏倚也、知其孝義之美、盈州閩也、知其清操高節、著

聞邦國也、知其辭藻之秀、(『脇蘭室全集』一五八頁)

つまり、帆足図南次は『帆足万里・脇愚山』の中でこのことを説明して、

自分に業を学んだ南豊の脇子善の才知はすぐれて、他をこえている。その重々しく落ち着いて、言葉数の少ない徳の高い人である。その学問は深く、見識は高く抜きん出て、一方に片寄っていない。そのりっぱに尽くす孝行は、村里で知らぬ者もない。その人柄が清らかで、節操高いのは、国に伝わっている。その見事な詩文のまさっているのは、ほとんど前に出た者たちをしのいでいることなどを知る。(『脇蘭室全集』)

と述べて、書物のはじめを飾っている。上の言葉は、竹山の目を通してみた愚山の人と学問に対するこの上もないほめ言葉である。それほど竹山が「実に容易に得られない人物」として、愚山にかけた望みと期待は大きかった。それだから数ある弟子たちのなかから、とくに愚山に寛政元年(一七八九)刊行の『草芽危言』(資料二六七頁参照)ならびに寛政十年(一七九八)出版の『逸史』の前書きや後書きを書かせたのである。いわば竹山は愚山を自分の学問を正しく受け継ぐにふさわしい人物とみていたからにはかならない。

寛政十年(一七九八)二月愚山が熊本の時習館訓導に任ぜられたのも、一つには師の竹山がその人物・学問を褒めて、熊本藩にすすめたからである。(一八八頁)

という。

蘭室は中井履軒(一七三二〜一八一七)について、「履軒先生は竹山先生の弟にて、経術文章難兄弟と称する人なり。隠操ありて世に出ることを厭れける」(『見し世の人の記』)という。また広瀬淡窓は『儒林評』の中で、中井兄弟について次のように表現している。

竹山ハ、非微逸史等ノ書ヲ著シ。其名天下ニ傳ヘタリ。但シ非微ハ壯年ノ作ニテ。晩年ニハ大ニ悔イシトカ承ル。此人容貌雄偉ニシテ。膽氣豪強ナリ。嘗て力士ノ谷風ト。枕ビキセシコトアリト聞及ベリ。是ハ非微ヲ著ハセシ處ニヨリテ。附

曾セシ話ナルベシ。龜井父子ハ。宋學ノ人ヲ惡ムコト。幾ント讐ノ如シ。然レトモ竹山ヲハ毎々豪傑ト稱セラレシヲ聞及ベリ。履軒ハ一家ノ學ニテ。竹山トハ異ナリト見エタリ。經義ハ極テ精シカリシトナリ。隱君子ニシテ。世人ニ交ラズ。然レトモ豪勇ナル氣象ノ人ナリ。龜昭陽東游シテ歸ラレシ時。予ニ語テ曰ハク。東遊中兩才子ヲ見タリ。賴子成。韓聯玉ナリ。豪傑二人ヲ見ル。中井履軒。村上太和ナリト。

龜(井)昭陽(一七七三〜一八三六)は、字元鳳、空石と号し、名は昱いづく又は昱いづく太郎と称し、南溟なんめい(一七四三〜一八一四)の長子。

四、開塾

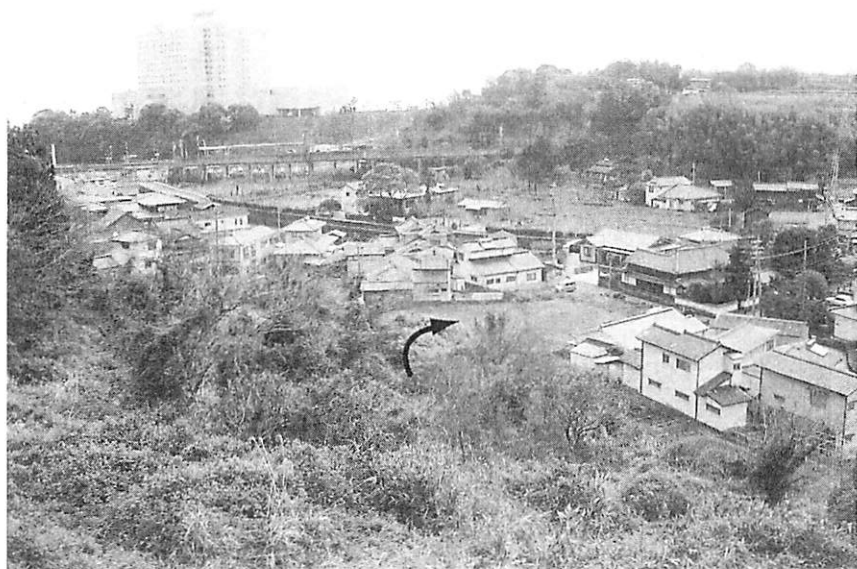
1、帆足万里の入門

蘭室が郷里の小浦に塾を開いたのは、大坂遊学から帰った後の天明八年(一七八八)頃のことであろう。その塾に万里が入門したのは、寛政三年(一七九一)十四才の時。それから蘭室が同十年(一七九八)熊本藩藩校時習館の訓導として小浦を去るまで、万里十四才から二十一才の最も多感な時期を、この塾で勉学に励んでいる。万里二十四、五才の著書『肄業餘稿』には、次のようにある。

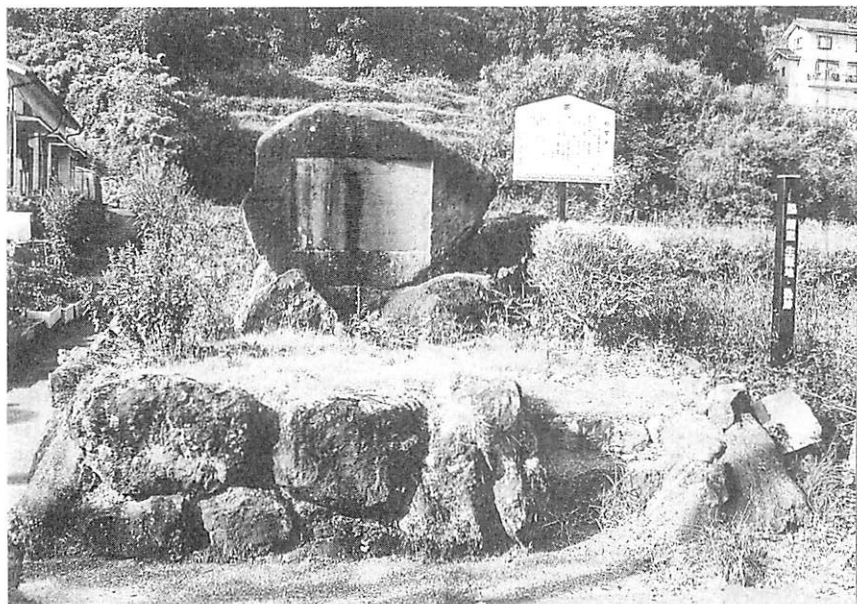
予年十四、見ニ蘭室先生一、受レ業、先生授以ニ作文法一、魯鈍之質、雖ニ於レ文無レ成、至レ今讀レ書、不レ苦ニ太難レ解者、先生之徳也、故平日教ニ兒童一、以ニ作レ文讀ニ舶來書一爲レ先者、非レ欲ニ其爲ニ善文之人一也、蓋不ニ略能レ文、讀レ書不レ能レ得ニ深解ニ也、(『帆足万里全集』上巻、五八八頁)

先生には、作文法を授けられた。私は魯鈍の質で文が成ってはいないとは言え、今に至るまで書を読むのに はなはだ難解だと苦しまないのは、これ一重に先生のお陰であるという。

作文を重んじたが、文章と共に作詩も学んだ。『帆足万里・脇愚山』によると、



小浦と塾跡



蘭室の私塾跡・生誕地と「猗々者蘭」の詩碑

愚山が塾則のなかで、「詩は自分の情を詠みこみ、おもしろさをよせる手立てである。力があままっているなら、つとめはげんでも構わない」と示した教えに従った万里は、詩文で名をなすより、本来の儒学者になろうと心掛けて、ただ余力をその方面に注いだに過ぎなかったと考えられないでもない。しかしそうかといって文学を創り、味わうだけの伸びやかでうるおいのある心情が乏しかったということではなく、その証拠には弟子の岡村蘊谷が編した『帆足先生文集』三巻、同じく石川総弘編の『西嶋先生余稿』上下二巻があって、万里のゆたかな文学の心をぞんぶんに語っている。(九十頁)という。

また「万里が淡窓の伯父の秋風庵月化の遺稿『秋風庵文集』に、鳴城罷士という名で和文の序を寄せていることも、彼がただの儒学者でなく、俳句に心を傾けていた一面を語っている」(同九三頁)という。

天保七年(一八三六)、淡窓の代表的詩集『遠思樓詩鈔』に「序」を寄せた帆足万里は、「自分ではいわゆる詩のことをよく知らないで詩を作る者」とへりくだっている。また田能村竹田も、「この人は儒者であって詩人ではない」と評しているが、万里は詩を特に専攻(詩人たらんと)したわけではないが、気分転換に詩や和歌・俳句を楽しんだのである。万里は蘭室塾で秀才ぶりを発揮し、師は「日出の帆足生、才峰秀出、けだし鷄群の鶴なり」(『蘭室集略』続編卷之六)と表した。そして、「なんじの文章九州を圧するを期す」という蘭室の期待通りに、万里は天下の立派な学者として成長した

2、高山彦九郎との出会い

九州を巡回中の彦九郎は、寛政四年(一七九二)十二月蘭室を訪ねて二泊している。『高山彦九郎日記』第四卷(西北出版・昭和五十三年十月)によると、寛政四年正月元旦から七月五日(但し、六月五日から十日までは欠)までの「筑紫日記」が残されているが、肝心な同年十二月の日記が残されていない。翌年六月二十七日久留米で自刃(切腹)した際、破棄されたものとおもわれる。

日記の概略・内容は、前書解説によると、

本日記ハ熊本ニ四年正月元旦ヲ迎ヘルニ始マル。朝威ヲ背負ヒ準国賓トシテ遇セラレタ五十余日ニ巨ル熊本人士トノ猛烈ナ交遊ノ後、入薩ノ壮途ニツキ南下スルガ、先ズ人吉ヨリ東行シ九州山脈ヲ横断、日向深山ノ米良ニ入り更ニ東海岸ノ高鍋、美々津ニ出デ、再ビ引返シテ市房山頂ヲ究メ西海岸ノ佐敷ニ出ルト云フ鬼没神出ノ足跡ヲ印シ、秘密ノ国薩摩入口野間関ニカカル。爰ニ止メラル、事半月ノ後遂ニ入国、鹿児島デハ藩主以下ニ異常ナ関心ヲ沸騰セシメ、藩士ハ勿論朝鮮人子孫琉球人トノ間ニサヘ劇甚ナ交友ノ日ヲ送ルコト五十余日、其ノ間国土最南端ノ海門岳・坊ノ津ヲモ一巡シテ琉球ヲ望見スル。ヤガテ霧島山頂ニ攀ヂ、都城・飢肥・宮崎・佐土原・高鍋ヲ経歴スルコト約一ヶ月ノ詳記ヲ以テ切レテ居ル。

(一三三頁)

とある。

福岡では亀井南溟と親交し、南溟の紹介で九州各地の志士と交流した。この時日田の広瀬家や小浦の脇家についての情報を、入手したものと思われる。熊本では、藪孤山と高木紫溟が中心であった。

「筑紫日記」をみると、寛政四年正月元旦は藪孤山宅で春を迎えている。そして同月十三日条によると「時習館開講」とあり、本年の開講に家老堀丹右衛門・有吉主膳以下も出席している。日記には、藩校の諸先生方との語らい、管内の様子も記されている。

つまり、「講堂の内東西七間半・南北八間斗」とあり、「文師二十六人・武の師五十九人也」とある。また本日の聴講生は二百余人とあり、この日だけは学生にも酒が振る舞われている。「仰山の額は靈感院（熊本藩六代藩主細川重賢）の書也、尊明閣は長岡内膳（細川一門で時習館総教）の書、時習館篆書玉山書す」とある。注⑥

夜になってから、「長瀬七郎平・安野形助・辛嶋才蔵来る、吸物酒にて酌ミ侍る、殆ト鷄鳴に及ぶ」とある。長瀬七郎平（一七六五〜一八三五）は真幸まゆきのことで、藩校時習館教授高木紫溟の信頼厚く、寛政五年（一七九三）国学の大家本居宣長に

入門し、その高弟となる。門人に中島広足ひろあしがいる。また安野形助は時習館の訓導で、本日の開講あたつての講師を務めた人で、高木紫溟の門人。

この日彦九郎が作った歌は、次の通りである。

玉銚たますけの 道をいねゐて この頃の

時の習なまひを 見るそ楽しき

天地あめとの 有あむ限は 栄えよと

尽つくしの旅の 中も忘れず

正之

「筑紫日記」の寛政四年二月十一日条をみると、「帰る時に高寿へ寄る。大村亀之助、郡喜八郎座に有り、大久保村に脇謙隆とて義一郎族居るとぞ」とある。この記述以外に脇謙隆に関する記述は一切ない。夕方高木氏宅への帰途「高寿」へ寄つて、右のようなメモを残している。この時の話題に、義一郎が登場したのであろう。

彦九郎は日田を訪れ、淡窓の父とも親交があつた。淡窓十二才の時ときで、寛政五年（一七九三）の『懐旧樓筆記』によると、次のようにある。

此歳上野ノ國ヨリ。高山彦九郎ト云フ人。當縣ニ來リテ。高田屋利右衛門カ家ニ滞留シタリ。予カ家ニ訪來リテ相見シ。先考ト至ツテ親シカリシナリ。彦九郎名ハ正之。字仲繩、年コロハ四十餘ナリ。顔面雄壯ニシテ。眼大ニ。鬚多シ。壯年ヨリ浪遊ヲ好ミ。足跡ホトント天下ニ遍シ。名山勝水奇人異士ヲ訪フヲ以テ事トセリ。故ニ諸方ノ名家。皆是ト親善ナリ。當縣ヲ去ツテ後。筑紫ノ久留米森嘉膳トイフ人ノ家ニ滞留セシカ。彼家ニテ自殺シタリ。其故知ルモノナシ。此人予ヲ稱シテ才子ナリト云ヒ。他方ニモ悠揚シタリ。予一日百詩ヲ詠セシコトアリ。其時彼ハ已ニ我縣ヲ去リタリ。先考其稿ヲ寄セシシ玉ヒシニ。和歌ヲ詠シテ贈レリ。

大和ニハ聞モメツラシ珠ヲ聯ネ。一日二百ノ唐歌ノコヘ。

彦九郎ニ相見セシ時ハ。予若年ニテ。其人トナリヲ察スルニ及ハス。

後年筑前ニ遊ヒ。南溟先生ニ陪セシニ。彼カ人トナリヲ稱シ。非常ノ豪傑ナリト云ハレタリ。〔淡窓全集〕上卷三七頁)

また、

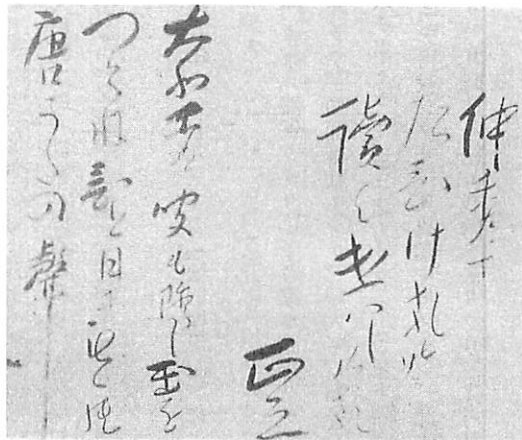
實ニ一世ニ高名ナルモノナリ、此人極メテ人ノ善ヲ喜ヒ、美ヲ揚クルヲ事トス、其ノ至ル處、孝子忠僕等ノモノアレハ、力ヲ盡シテ是ヲ悠揚ス、天性慷慨ニシテ、玉室ニ志深シ、其自殺セシコト、世ヲ憤ル旨アリテノ事ナルヘシ、辭世ノ歌ニ三首モアリシヤウニ聞及ベリ」(三十八頁)

ともある。

淡窓は彦九郎が日田を訪れた頃には、日に百詩を詠ずるまでになっていた。なお淡窓は十才の頃「予既ニ松下先生(西洋)ノ門ニ入り、始テ詩ヲ学フ、一日ニ七絶一首ヲ以テ課トス、遂ニ七絶二百餘首ヲ得タリ、其後ニ至ツテ五律ヲ学ヒタリ」(同、一六八頁)とある。

ちなみに淡窓の詩に対する考え方は、どのようなものであるうか。淡窓には『遠思樓詩鈔』があり、また宜園には『宜園百家詩』など、高弟の詩集も含め多くの詩が残されている。また作詩の方法・古詩の批評等につき、門人の問いに答えたものとして『淡窓詩話』(広瀬青村の校訂で明治十六年刻)がある。それによると、

詩ヲ作ル人ハ温潤ナリ、詩ヲ好マザル人ハ刻薄ナリ、詩ヲ作ル者ハ通達ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ偏僻ナリ、詩ヲ作ル者ハ文雅ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ野鄙ナリ、其故何ゾヤ、詩ハ情ヨリ出ツルモノナリ、詩ヲ好マザルハ、其人ノ天性ニ情少ナ



高山彦九郎の書

(『淡窓全集』より)

キガ故ナリ、若シ之ヲシテ詩ヲ学バシメバ、自然ト情ヲ生ズベケレドモ、己レガ性ノ偏ナル所ヨリシテ、勉強シテ学ブコト能ハズ、愈々無情ノ窟ニ墮ツルモノナリ、〔淡窓全集〕中巻一一頁）

という。これとほぼ同文が、『夜雨窠筆記』（『淡窓全集』上巻）にも納められている。

また同書に依ると、門人奏韶が問うて言うことには、

世儒、経術文章ヲ以テ自ラ許シ、先生ヲ卑メテ詩人トス、小子輩不平ヲ抱ク所ナリ、何ヲ以テカ嘲ヲ解カン。これに対し淡窓の答えは、「予詩ヲ好ム故ニ、詩人ト云フ、猶酒ヲ飲ム者ヲ酒人ト云ヒ、碁ヲ好ム者ヲ碁人ト云フカ如シ、其實ニヨリテ、名ヲ命スルナリ、必シモ卑ムルノ義ニ非ス、海内ノ詩ヲ作ルモノ、萬ヲ以テ数フヘシ、然レトモ、人々詩人ノ稱アルニ非ス、余獨リ此名ヲ得ルコト、幸ニ非スヤ、予ニ於テ咸佩スヘキノミ、何ノ不平ヲ抱クコトカコレアラン、又彼レ経術文章ヲ以テ自ラ許スコト、勝手次第ノコトナリ、我是ヲ争フニ心ナシ、」といい、「故ニ余ハ詩人トヨハレタリトテ、不面目トモ思ハズ、當世ノ経術文章ノ諸先生ヲ、妬ヤシクモ思ハヌナリ、畢竟書生ノ事業名譽、水上ノ泡ノ如シ、忽然トシテ形ヲ現シ、汎々乎トシテ流ニ随ヒ、或ハ三步ニシテ消エ、或ハ五步十步ニシテ消ユルナリ、強テ甲乙ヲ分ツナラハ、少シニテモ遠ク流レテ、遅ク消ユル方カ、勝ルトモ云フヘキナリ、吾子ノ輩尚ホ少年ナリ、後年ニ至リ、得ト見ルヘシ、今日強テ高卑ヲ論スルハ、無用ノ事ナリ、〔淡窓全集』上巻、三七〜八頁）

とある。

世間の人々（儒者）が淡窓のことを詩人とさげすんでも、淡窓は書生の事業名譽は所詮「水上ノ泡ノ如シ」としている。「當世ノ経術文章ノ諸先生」がいつまで泡が残るか、「後年ニ至リ、得ト見ルヘシ」という。時がたてば、「遅ク消エタル方」は誰なのか、自ずと分かるという。淡窓の自負心が、ここに表れている。

また奏韶が問うことには、「詩ヲ学フノ益ハ、孔子ノ言ニ盡セリ、然レトモ、今ノ詩古ノ詩ニ非ス、故ニ世儒務メテ其無用ヲ論ス、イカゞ心得ヘキヤ」という。それに対し淡窓は、「或人余ニ問フ、吾子詩ヲ好ム、詩向ノ益アリヤ、予曰、吾子酒ヲ

好ム、酒何ノ益アリヤ、問者曰、何ノ益ト云フコトカアラン、吾性ノ好ム所ナリ、予曰、吾モ亦性ノ好ム所ナリト、前ニ言ヒタル如ク、己カ技藝ノ功能ヲ説キタツルコト、卑シムヘキコトナリ、吾子詩ヲ好ムトモ、人ニ對シテ其功能ヲ説クコトナカレ、タ、自己ノ娛ミノ爲メト稱スヘシ、レといひ、「孔子曰、溫柔敦厚ハ詩ノ教ナリト、此四字、唯一ツノ情ノ字ヲ形容スルノミ、是レ予カ弟子ヲシテ詩ヲ学ハシムル所以ナリ、吾子詩ヲ好ムカ故ニ、談此ニ及ヘリ、慎ンテ門外漢ト之ヲ云フコトナカレ」
(同上、三八〇四〇頁) という。

蘭室は彦九郎との出会いを、どう感じたのであろうか。両者の邂逅は寛政四年（一七九二）十二月で、「見し世の人の記」で次のように記している。

●高山正之といふは、上野國新田郡細谷といふ里の人にて、少年の頃より文武の學に志ありて、諸國をも年久しく遍歴し、上は堂上の貴きより、下は卑賤の輩までに交わり、名ある人をば必訪ひて、勝地古所をもあまねく見めぐり、奇士といふべきをのこなりける。五十に近き頃つくしに來り、予の菊園の庵にも二日とまりて、祖先の事など語り出、新田郡の様子をも委しく話し、

たづねつくしつくしよわびぬかみつけのにひたの山のみねの白雲

などよみける。此をのこ、談話の中にたま／＼天朝衰運におよべば、必はら／＼と涙を落しき。そのうち筑後の國にて身まかりぬときこえし。『蘭室全集』三八一頁)

「脇屋」という名字發生の地が、高山の生まれた新田郡細谷村の近くで、その彦九郎が語る先祖の地、先祖の功績を、共に熱っぽく時には涙を混じえて夜遅くまで語り合つたに違いない。この時蘭室が作つた歌が、「まがき草」『大分県史料』第十二卷・昭和三十五年十月、大分県教育委員会』に納められている。

かずつけの國、にひたのこほりなる、高山の正之（彦九郎）にものがたりして
 ふるさとと きくもなつかし 鳥が啼

あまずにすめる 人の言に
(二二六六頁)

ここで思い起こされるのが、蘭室十九才の折、先祖ゆかりの深い吉野の山深く訪ね歩いたことである。新田の先祖発生の地をも、巳れの足で訪ねてみたいとの思いが湧いてきたに違いない。

両者の出合いは、蘭室二十九才・彦九郎四十六才の時で、その時の出来事を門下第一の高足帆足万里に物語り、万里はそれを最愛の高弟松岡蕨谷（一八二〇～九五、東京大学教授）にたび／＼物語っている。

筒井清彦は、「この両先覚の出会いはその後の豊後の学者、志士に大きな影響を与えた所に意義がある」といい、次のように記している。

語り継がれ言い継がれて、先生門下の直弟子、孫弟子、及び彦九郎が遊説した土地の知己とその子弟、いずれも測り知れぬ感化影響を受けている。特に孫弟子や二代目に強烈な感化を与えている。豊岡、日出、鶴崎、日田については一応触れたが、竹田岡藩勤王派を見ても角田九華が鶴崎に出て先生に学び、その九華の門人小河一敏は竹田勤王派のリーダーとなり、小河の門に軍神広瀬中佐の父重武が学び、この師弟は十数回の藩の処分を共にしている。又前記彦九郎が延岡から竹田へ入り熊本へ抜けた時、竹田の奥の玉来、萩で我が国最後の陸軍大臣阿南惟幾の先祖、阿南氏数名と会っている。阿南將軍最後の威儀切腹の由来する所である。精神史精神運動（思想運動、世界観的政治運動も同じ）というものは、このような性質と構造を持っているのである。こう見て来ると先生と彦九郎の一期一会は、「豊後学」の流れに方向を与えたものとも言える。

これは豊後のみならず、「彼ニ慕ヒ寄ル肥薩隅日ノ交友日記ニ載ル者数百名、総ジテ維新志士ノ父祖ニシテ高山ノ息吹カラヌ者ナシ」（『高山彦九郎日記』第四卷、「筑紫日記」解説一三二頁）という状態であった。（五、時習館に招聘）以下、次号に発表）

注① 蘭室関係の資料については、現在大分県立図書館（先哲史料館）に寄託されている。内容は、前記肖像画を含め五幅の掛軸、脇屋氏系図二巻・蘭室写本の万葉集・大正五年に正五位を贈位された時の位記など、十三件・計二十四点。

注②

『三浦梅園』の著者田口正治は「修齡」（二二頁）と読ませている。しかし、三浦梅園研究会発行の『梅園外伝』（昭和六十三年三月）の「脇室」の項では、「脇室は梅園の長子修齡（諱黄鶴・別掲）と同年で」（七三四頁）とあり、「しゅうれい」とルビしている。また『大分県歴史人物事典』の「三浦修齡」の項でも、「しゅうれい」としている。この外諸書に同様のルビが見受けられるが、広瀬淡窓など黄鶴と交流のあった学者が、「主齡」とも表現していることから、ここはやはり、「しゅうれい」と称したと思われる。

注③

『肥後先哲偉蹟』（武藤巖男編）所収の「脇愚山」の項で、「岡松翁話」を引用して、次のように紹介している。万里の高弟岡松麴谷が、万里（鵬卿）から聞いた話である。

子善（愚山）嘗て鵬卿に語て云、高松たかたけの代官菅谷矢五郎余（愚山）に語るには、江戸にては此頃西洋の事を講究すること流行せり、西洋の事も旁々学ばざるべからずと、鵬卿の心を西洋に潜めしは、蓋師の意を受しに因りしならん、（二四一頁）

注④

『鶴崎市史人物篇』（昭和三十二年十一月・鶴崎市役所）の「三浦惟厚」の項によると、「修齡には、初め長男があったが、不幸にして夭死し、その後に生まれたのは、みな女子ばかりであった。そこで修齡は養嗣の物色を、かねて昵懇の蘭室に依頼した。蘭室も何とか立派な人物を世話したいと努力したらしく、その結果よく人柄のわかつている安達惟厚を推挙するに至ったようである。」（二〇〇頁）とある。相良茂との話がこわれてから、蘭室を通じて惟厚との話が進められたようだ。

注⑤

これについては拙稿「広瀬淡窓の府内紀行」、『大分県地方史』第二〇号所収、昭和六〇年十二月・大分県地方史研究会）を乞ひ参照。

注⑥

『高山彦九郎日記』には「仰山」とあるが、これは「仰止」のミスプリントである。重賢は、宝暦十年六月講堂尊明閣落成の暁に自ら筆を染めて、「仰止」の扁額をしたためた。